

本居宣長母お勝書簡における漢字使用に関する考察

——使用字種の傾向を中心に——

永井悦子

一 はじめに

江戸時代、女性用に編まれた往来物の種類は、一千種とも、また三、四千種ともいわれ^①、女性の手習い教育の機会が広まりつつあったことがうかがえる。しかし、こうした機会に恵まれた女性が、実際にどのような文字や仮名遣いを学び、そして使用したのかという言語生活の実態に関しては、いまだ検討の余地が残されている^②。

そこで小稿では、本居宣長の母「お勝」(一七〇五(宝永二)年(一七六八(明和五)年)が宣長に宛てた六六通の書簡を資料として、江戸時代女性の日常的な言語使用の一端を明らかにしていきたい。庶民層の女性でこれだけまとまった量の書簡が残されていることは非常に珍しく、当時の女性の言語生活を探る上ではたいへん有用な資料だといえよう。仮名字体の使い分けに関する実態について報告した拙稿(二〇〇八)に続き小稿では、使用漢字の実態を調査していくこととする。

また、稿者はこれまで江戸時代女性の言語使用について明らかにするため、当時の女性が書簡文をしたためる際や文字を学ぶ際に用いたとされる女子用往来物の実態調査を重ねてきた^③。しかし、往来物はあくまでも「教材」であり、当時の言語使用の実際をどこまで反映したものであるのか、検証しておく必要があると考える。そのため拙稿(二〇〇八)では、お勝が書簡で用いた仮名字体の使い分けを明らかにするとともに女子用往来物のそれと比較検討し、双方の傾向が非常に近いものであることも示した。小稿においても同様に、実際の書簡文と女子用往来物における漢字使用とが符合するか、あわせて確認していくこととしたい。

二 本居宣長母お勝とその書簡について

当然のことながら、本居宣長その人に関する研究はこれまで数多なされてきているが、母親であるお勝に関して知る手がかりはきわめて少ない。拙稿(二〇〇八)に重なるところもあるが、まず、その出自や生育環境について『本居宣長辞典』や中根(二〇〇二)をもとにまとめておきたい。

本居宣長の母お勝(以下、「お勝」とする)は、松坂新町の村田孫兵衛豊商の四女として生まれ、二四歳で小津定利に嫁ぎ、宣長はじめ二男二女をもうけたという。生家である村田家は、京都や江戸で木綿や茶などを扱う商家で、現在も村田家が奉納した鳥居が地元松坂の神社に残ることなどから推して、豊かな経済力を誇っていたと考えられる。また、一族のなかには、北村季吟の門人となる者や垂加神道者、浄土宗の高僧などがおり、文化的なことからも理解のあつた家系であることもわかる。たとえば、宣長に宛てた書簡(No. 33^④ 宝暦五年霜月十九日)には、次のような箇所がある。

一、来年子ノとし、しん町母人様八十歳ニ御成被成候、事多中ながら八十ノが御祝候て、一首進しまし被下候、七十ノ節われら一首致し、八十ノかの事祝進し候、又八十八までの事ニ御よみ、一首被成進し被下候、尤正月朔日ニ祝義八いろそろへ、心計ニ進し候半と存候

八十になろうとする実家の母(宣長の祖母)のためにそれを寿ぐ歌を作り、贈ってほしいという依頼の文面である。お勝が小津家へ嫁すまでのあいだ、家庭内もしくは寺子屋などで手習いや作歌といった種々の教育を施されていたであろうことがこうした書簡の一端からうかがえる。

次に、調査資料となる書簡についてまとめておく。『本居宣長全集 別巻三』⁵⁾には、お勝が宣長に宛てた六八通の書簡（一七五四〈宝暦四〉年一月八日〜一七五七〈宝暦七〉年九月八日）が収められている。小稿では、これらのうち本居宣長記念館に所蔵され、実際に確認することができた六六通を調査対象とした。⁶⁾

本居宣長は、一七五二（宝暦二）年五月から一七五七（宝暦七）年、二二歳から二八歳までの五年半を京都で過ごし、医学を修めるとともに和歌や国学をはじめとする種々の学問にも精力的に取り組んだという。残されているお勝の書簡はいずれも、この留学中の宣長に送ったものである。この間、宣長が母に宛てた書簡は失われたものが多いようで、『本居宣長全集 一七』⁷⁾に収められるのは二通のみであるが、お勝が宣長に宛てた書簡の多くは現在に至るまで、丁寧に保管されていたようである。

書簡の内容は、身近な人々の安否の知らせや問い合わせをはじめとし、次の「例1」のような仕送りの衣類や食料品の説明、近頃の出来事の報告などが主である。時には、金策の苦労話や兄弟の縁談に関する相談ごとなどをつづったものも見受けられる。

【例1】

よき便二候ま、せんたく物事つて進し候

一、黒わた入一

一、同あわせ一

一、下帯 壹つ

一、わた入羽織 二

同あわせ一

一、かんひやう

一、袋 貳つ

右書付の通、已上数七つ、御うけ取可被成候、尤わた入その外はおおり共、いろ上二遣し候やうに御申し候へとも、二品共いまたあたらしきもの、あまりよこれも見え不申、わた入ノ方ハすそつき直し申候、羽織ハうら替おもて縫返し進し候、此通にてまつふゆ中用申さるへく候、又春二成いかやうにも致し可申候、あわせもあしく成候故、色上ニやられ不申候故、手前ニてあらいはり致し進し候、秋春中用申さるへく候、此あわせもはやきられ不申候、下帯もよくあら進し候、たひもなおし進

し候や、かわたひニても調、はき申され候哉、返事致し申さるへく候、もしよききる物入候ハハ、こ、もと二御さ候黒のきぬのをつかハし申へく候、よわり候ま、着申さるへく候 (No. 7 宝暦四年八月廿一日)

【例2】

伊兵へ殿御物語ニて承候へは、そもし殿事、ことの外大酒被致候様ニ、其御地ニて伊兵へ殿へ物語御さ候よし承申候、さて（さて）おとろき入候てあんし申候、そもし殿、何れもよくよくかんがへ致し申され候やうニおもわれ候て、人の事ハよく見へ我事ハしれぬもの故、すへ（すへ）の事心もとなく、朝夕おやの身ニてあんし申候、下地生れつき、人よりハ勝れよわく生れつき、さやうの人ニ生れ、大酒被致候ハハ、當分身のさわりニ成申さす、おもしろきと存られ候ても、何れ身のかひをなし申よし、人々常々申事ニ候ま、おやへかう（かう）一大事と、そのうへ、先祖も跡相そくも心かけ申され候事ニ候ハハ、酒のみ申され候毎ニ、おやへふかうとわれらか事もおも出し候て、さかつきニ三つよりうへたべ申されましく候、もし又ふかくしい候人々御さ候ハハ、遠方ながら母見てる申、かたく申越候故、日々のせい言と存、此うへたへ申さぬよし御申、かたく（かたく）つつしみ申さるへく候

(No. 44 宝暦六年文月十九日)

なかには右の「例2」のように、深酒をせぬようにと宣長の留学中の素行をたしなめる厳しい文面も見られるが、おおよそどの書簡もきわめて実用的なことがらをしたためたものであり、当時の日常的な文字使用の実態を探るには好個の資料だといえよう。

三 使用漢字の実態について

(1) 使用漢字数

お勝の書簡、六六通に用いられた文字数を整理すると、左記の通りとなる。⁸⁾ いずれも延べ字数である。ここでいう「符号類」には、くの字点や一つ点などの繰り返し符号と「より」や「まいらせ候」など、合字による特殊な形で表されたものも含んでいる。ただし、「々」に関しては漢字として集計した。なお、括弧内に示した数値は、総文字数に対する割合である。

「お勝書簡の文字数」

漢字 一七、一〇四字（四九・〇％）
 仮名 一六、九六九字（四八・六％）
 符号類 八四四字（二・四％）
 総文字数 三四、九一七字（二〇〇・〇％）

先の「例1」～「例2」からもうかがえるように、お勝の書簡には漢字の使用が少なくない。実際に漢字使用率（総文字数に対する延べの漢字数）を算出すると、四九・〇％となり、漢字がほぼ半数を占めていることがわかる。

書簡は候文体でしたためられることから、文学作品に比べ漢字使用率が高くなることは容易に予想されるが、その他にお勝書簡の場合には、これらが他家に宛てたものでないため格式や儀礼をさほど重んじる必要がないこと、肉親への日常的かつ実用的な内容（仕送り品の説明や伝言）を多く含むものであること、さらに読み手が教養豊かな宣長であるということなど、お勝が漢字を使用することに対して制限を与える状況が存在しない点にも着目しておきたい。

右の通りお勝書簡の場合、一般的な女性が書簡をしたためる環境とはいくぶん異なる状況でものされたものであったことは考慮に入れなければならぬが、当時、女性の書簡文は仮名文字でやさしく記すようにと、手習い書や書札礼においてことさらに指摘されていることを勘案すれば、四九・〇％という数値は、決して低いものでないといえよう。これに関しては、次章でさらに往來物の漢字使用率との比較を行い詳述したい。

(2) 延べ字数、異なり字数と累積使用率

お勝書簡における延べと異なりの漢字数は、次の通りであった。

延べ字数 一七、一〇四字
 異なり字数 四五六字

たとえば、彦坂（一九八七）でなされている江戸時代の洒落本における使用漢字の調査結果をみると、延べ字数一三、五五二字に対し、異なり字数は一、三九一字となり、一字あたりの平均使用回数をもとめれば一〇回弱となる。書簡文とは文体の大きく異なる文学作品と単純に比較をすることはでき

ないが、お勝書簡の一字あたりの使用回数が非常に多いことがうかがえる。さらに、累積使用率をもとめてみると、一部の漢字が多用されていることが見てとれる。異なりと延べの累積使用率をまとめたものが以下の【表1】である。これによると、異なり字数の約三％にあたる一六字で延べ字数の約五〇％を、異なり字数の約一一％にあたる四九字で延べ字数の七〇％をまかなっていることになる。前節でも触れた通り、候文体でしたためられている書簡文には「可被成候」「被下候」「不申」といった定型表現が多く、一部の漢字が頻用される傾向が強いことがうかがえる。

【表1】お勝書簡における漢字の累積使用率

延べ累積比率	累積漢字数（異なり累積比率％）
～20％	1（0.22）
～30％	3（0.66）
～40％	7（1.54）
～50％	16（3.51）
～60％	29（6.36）
～70％	49（10.75）
～80％	79（17.32）
～90％	135（29.61）
～100％	456（100.00）

江戸時代の代表的な往來物作者居初津奈が編んだ『女文章鑑』（貞享五／一六八八年）の巻尾に付された女性消息文心得集には、「一 女文章はめづらしき字をかくべからず 仮名文字にてかく最やさしき也」という一項がある。ここでいう「めづらしき字」は、仮名に対して漢字を指すものと考えられ、女性の消息文における漢字の使用が避けるべきことであつたことがわかる。しかし、こうして頻用されている字種は、消息文をしたためるような女性であれば、常識的なものであり、身につけておかなければならない基本的な字種であつたということもできよう。これについては、次章で往來物における基本的漢字群と比較を試みることにしたい。

(3) 高頻度字種の傾向

ここでは前節で触れた延べ字数全体の七〇%を占める五〇字を対象にお勝書簡の高頻度字種を検討していくこととする。(紙幅の関係上全使用漢字を掲載することはできなかったが、使用頻度一位の「候」字から一〇〇位の「給、而、今、四、著」までの一〇四字について稿末の【表4】¹²⁾に掲載したので、あわせて参照いただきたい。)

この五〇字は、おおよそ「書簡文体を構成するのに必要な字種」、「書簡文体に頻用される敬語表現を表記するのに必要な字種」、「書簡文に頻出する語を表記するのに必要な字種」、「日本語表現において頻出する語を表記するのに必要な字種(助動詞の漢字表記を含む)」のいずれかに区分することができる。

まず、書簡文体を構成するのに必要な字種として区分できるのは、次の七字である。

候、々、日、参、月、間、尚

これらは、いずれも書簡文特有の「さつそくうけ取状御越可被成候」(No. 2)といった文末表現や「したい二あつさ二なり候間 随分(随分) ねひへも致し不申候やう二、心かけ申さるへく候」(No. 4)といった接続表現、「尚々」「参る」など頭語や結語といった書簡用語の表記に使用されることが多い。「候」「尚」はほとんどが書簡文用語として使用されているが、たとえば「参」は「そののち文も参不申候、さためてうけ取申さるへく候とそんな候」というように謙讓語「参る」としても多用され、「間」は、「間合」「此間」「間もなく」「一間」等、書簡文体の接続表現のほかにも多様な語表記に用いられている。

また、書簡文体に敬語表現は要用のものであり、「書簡文体に頻用される敬語表現を表記するのに必要な字種」も高頻度で現れることとなる。右で触れた「参」も含めて以下の九字である。

申、御、下、成、致、参、殿、存、様

「殿、様」といった敬称に用いる字種のほか、「申、下、成、致、参、存」はいずれも敬語動詞の表記に使用される。

右二項目は、書簡文体の構成上必須の語や表現を記すものであったが、このほかに書簡の内容に関連し、文面に頻出する語を表記するのに必要な字種の頻度も当然ながら高くなる。具体的な字種は左の通りである。

入、心、悦、進、分、越、用、母、人、内、両、無、文、出、取、届、物、随、安、中

先にも述べたとおり、書簡の多くでその書簡とともに届ける仕送りの品についての説明がなされているため、「進、越、用、出、取、届、物、中」のような品物や伝言のやりもらいに関する語の表記に使用される字種が多くなる。特に「進」の場合は、以下の例の通り仕送りの品を届けるという実質的な意の他に「申進ず」のような抽象的な意でも用いられるため、頻度が高くなっている。

帷子ち、みよくあらひ、ぬい直し進し候、たけ少々みしかく成申候、これ迄長く御さ候、くるし有ましくと申し候、先日申進し候ことく、此嶋ほそく御さ候へは、ふたん着二ハあしく御さ候

(No. 3 宝暦四年四月廿八日)

また、「心、悦、安」は以下の通り、書簡文の内容としてはこれも要用の表現である、安否を問う文面で使用されることから頻度が高くなっている。

御息もしにて御つとめ被成候よし、悦申候、爰もと替る事なくふし二候、御心安おほし被下候

(No. 4 宝暦四年五月十六日)

このほかに日本語表現において頻出する語を表記するのに必要な字種として、次の一二字が挙げられる。

事、此、爰、何、其、一、三、十、被、度、可、不

日付や仕送りの品の数量を明記するための「一、三、十」といった数詞のほか、現代の一般的な文章でも多用される指示語の表記に使用される「此、爰、何、其」や形式名詞「事」、助動詞を表す「被、度、可、不」などの字

種がここには含まれる。現代と異なり、当時の書簡文では指示語や助動詞の類は漢字表記されることがもっぱらであったため、当該資料では高頻度で登場する。

右の通り、高頻度字種をその用法と照らし四つに分けて考察したが、これらに唯一含むことが出来なかったのが「兵」である。これは、書簡文中に「せい兵へ」「惣兵へ」「伊兵へ」といった人名が頻出したためである。お勝書簡において「兵」が人名以外に使用されることはなかった。この字が高頻度となったのは、お勝書簡の個別的な事情によるものといえよう。

さらに、お勝書簡の使用字種を現行の常用漢字表と照らし合わせてみると、四五六字中、四〇五字までがこれと一致し、さらに右でみた高頻度字種においては、「々、此、爰、其」の四字をのぞきいずれも合致する。先に述べたとおり、「々」をのぞけば、当時漢字表記されることが主であった指示語の表記に使用されていたものばかりであり、これは当時と現代との表記に関する事情の違いによるものである。よって、これら数文字をのぞくお勝書簡で使用された高頻度字種のほとんどは時代を問わず、日本語表記に欠かすことのできない基本的な字種であるということができよう。

四 女子用往来物における使用漢字との比較

ここまでは、お勝書簡の実態について考察してきた。本章では右の考察をもとに、実際に取り交わされたお勝書簡と書簡文を作成するために編まれた教材、文例集である女子用往来物の漢字使用にどのような差異が見られるのか、確認をしておきたい。

(1) 漢字数

女子用往来物の実態とどの程度の重なりをみせるのか比較検討するため、拙稿¹³⁾で調査を行ってきた一五種の女子用往来物における使用漢字数、使用率を【表2】に掲げた。

表中にある、「前期」「中期」「後期」の時代区分は、石川謙氏が江戸時代における往来物の出版状況をもとに定めた区分けである。具体的な年代は、次の通りである。

近世前期 慶長八／一六〇三〜元禄一六／一七〇三年

近世中期 宝永元／一七〇四〜安永 九／一七八〇年
近世後期 天明元／一七八一〜慶応 三／一八六七年

日本教育史の立場から研究を進める天野晴子氏によれば、女子用往来物は、上記時代区分でいう中期以降に使用者層が庶民層へ拡大し、それとともに、教材内容や形態などが実用的なものへ移行するという¹⁵⁾。

お勝書簡の延べ漢字数は、一七、一〇四字、異なり漢字数は四五六字、漢字使用率は四九・〇である。【表2】の数値と比較すると、天野氏が往来物の使用者層が拡大し、実用的な書簡文を多く収めるようになったと指摘する近世後期の数値と近いことが見てとれる。拙稿(二〇〇七)で、女子用往来物の場合、振り仮名の付され方などから、より多くの漢字を教え知らしめようという意図がうかがえることを指摘したが、振り仮名が付されていない実際の書簡文でもそれに近い数値が現れたことは、たいへん興味深い。

(2) 使用字種の傾向

お勝書簡に使用された異なり四五六字と一五種の女子用往来物から得られた異なり一、三五二字を照らし合わせると、お勝書簡の四五六字中四二一字までが往来物に使用された漢字と合致した。女子用往来物に使用された異なり漢字数はお勝書簡の三倍程度あるため、合致率が高くなることはある程度予測もできる。

そこで、拙稿(二〇〇三)でもとめた「往来物基本漢字群」との比較を行ってみることにした。「往来物基本漢字群」は、往来物における「使用頻度」に加え、複数の往来物でも幅広く使用されているかをみる「共出現度」、さらに一つの字種が往来物においてどれくらい多くの種類の語を表記し得るかという「カバー率」をもとに統計処理を施し、一三五二字に対し順位付け(一位から一九二位まで)を行ったものである。

その結果【表3】に示す通り、基本度の高い字種(往来物基本漢字順位の上位字種)との合致率が非常に高く、お勝書簡が女子用往来物において使用頻度が高く、用字バラエティも豊かな、いわゆる往来物基本漢字を数多く用いていることが見てとれる。

お勝がどのような教育を施され、どのような書物を座右においていたのか、それがわかるような記録や書付は現時点で発見されていないが、右のような結果を見る限り、女性の消息文例を集めた何らかの往来物や語彙集をも

【表2】女子用往来物（15種）における使用漢字数

時期	No.	往来物名	編著者	成立年	異なり漢字数	延べ漢字数(%)	総文字数	備考
前期	1	女庭訓往来	一花堂	万治 2/1659	451	2231(20.2)	11063	913(40.9)
	2	女初学文章	一花堂	万治 3/1660	90	901(13.1)	6863	5(0.6)
	3	女筆往来	中川喜雲	万治頃/1660	221	985(22.0)	4486	4(0.4)
	4	女用文章	源女	天和 2/1682	190	992(20.5)	4828	6(0.6)
	5	女書翰初学抄	居初津奈	元禄 3/1690	413	1522(35.1)	4341	786(51.6)
中期	6	女用文色紙染	田村よし尾	元文 3/1738	146	311(29.0)	1072	119(38.3)
	7	女文台綾囊	田中友水子	延享元/1744	387	1645(42.1)	3903	815(49.5)
	8	女千載和訓文	文正堂	宝暦 9/1759	797	7869(42.0)	18719	4808(61.1)
	9	女用文章糸車	田中友水子	明和 9/1772	441	1813(34.7)	5220	758(41.8)
	10	女文章宝鑑	沢井随山	安永 4/1775	526	4439(47.0)	9436	1554(35.0)
後期	11	女諸用文章	橘正敬	寛政 11/1799	652	6485(47.5)	13664	3366(51.9)
	12	婦人手紙之文言	十返舎一九	文政 3/1820	381	2449(39.4)	6223	925(37.8)
	13	女文章大和錦	池田東籬亭	天保 6/1835	541	6315(40.6)	15566	3548(56.2)
	14	女雅俗要文	為永春水	弘化 3/1846	678	6262(41.0)	15280	2413(38.5)
	15	女中用文玉手箱	山東京山	嘉永 4/1851	416	2957(54.5)	5421	748(25.3)
計					1352	47173(37.4)	126082	20768(44.0)

※備考欄の数値は振り仮名の数と漢字数に対する割合

以上、本居宣長の母お勝の書簡における漢字使用に関し、主に使用字種の
 実態とその傾向について考察を行い、さらにその実態を江戸時代に編まれた
 女子用往来物の実態と照らし合わせた。その結果、「女文章はめづらしき字
 をかくべからず」と漢字を書き散らすことを戒める指摘が数多くなされてき
 た江戸時代女性の書簡であるが、実際に取り交わされた書簡においては漢字
 使用率が高いこと、さらにお勝が実際にやりとりをした書簡と手習いや簡文
 の書き方を学ぶための教材である往来物における漢字使用の実態が非常に近
 く、拙稿(二〇〇三)で求めた基本漢字群上位字種がお勝書簡でも多用され
 ていることも見てとれた。

お勝書簡の漢字使用実態の考察から、当時、商家に生まれ育った庶民女性
 の識字力の一端を明らかにすることができたと考える。また、江戸時代の手
 習い教材の実態が当時の女性の日常的な言語生活の実態と遠くないこともま
 た確認し得たかと思う。

小稿では、漢字使用の考察のなかでも主に使用字種の頻度や高頻度字種の
 傾向を明らかにするにとどまった。さらに用字法など語表記の側面からも考

五 まとめ

とに教育を受けたと推測することが許されるのではないかと思う。

【表3】往来物基本漢字との合致数

往来物基本漢字		お勝書簡における 使用漢字数
順位	文字数	
1～ 100位	100字	88字
101～ 200位	104字	79字
201～ 300位	97字	43字
301～ 400位	102字	49字
401～ 500位	108字	39字
501～ 600位	94字	29字
601～ 700位	119字	26字
701～ 800位	94字	10字
801～ 900位	90字	12字
901～1000位	185字	20字
1001～1100位	98字	9字
1101～1192位	161字	13字
計	1352字	456字

察を加える必要があると考える。『女大学』や『女重宝記』などをはじめとした教訓書における言説の影響によって既成概念が形成されるきらいのあった江戸時代女性の言語生活の実態について、今後も書簡文をはじめとした実際に取り交わされたことばの実態を映す資料を収集し、当該期女性の言語使用に関する具体的な姿を明らかにしていきたい。

注

- (1) 石川謙・石川松太郎編(一九七三)「解説」によれば、二二〇〇種程度、さらにその後、江守一(一九九〇)によれば、三、四千種程度と推定される。
- (2) 梅村(二〇一三)でまとめられているとおり、日本教育史の分野では民衆の識字力獲得の様相やその方法に関する説明が進んでいるが、日本語学分野での研究はまだ少ない。
- (3) 稿者はこれまで、女子用往来の漢字や仮名遣い、仮名字体について以下のような考察を行ってきた。拙稿「近世初期女子消息型往来の仮名遣い―和語の仮名遣いについて―」(『日本語論叢』二二〇〇二)、同「初期女子用消息型往来における漢字・仮名表記の選択傾向」(『日本語論叢』四二〇〇三a)、同「女子用消息型往来における基本的漢字抽出の試み」(『計量国語学』二四―二二〇〇三b)、同「近世女子用往来における仮名字体」(『国語文字史の研究』九)和泉書院(二〇〇六)、同「女子用往来物における漢字使用の実態と傾向」(『早稲田日本語研究』一六二〇〇七)。
- (4) 書簡番号は、大野晋・大久保正 編集校訂『本居宣長全集 別巻三』(一九九三 筑摩書房)で付されている通りに用いた。引用するにあたって、くの字点は、繰り返し部分を括弧内に表示した。また、以下すべての引用文中に付した傍線は、すべて便宜的に稿者が施したものである。
- (5) 大野晋・大久保正 編集校訂『本居宣長全集 別巻三』(一九九三 筑摩書房)。
- (6) 残りの二通のうち一通は、お勝自身の筆でなく、後に他者によって浄書されたものであるため、調査からのぞいた。もう一通は國學院大學に所蔵されており、今後改めて調査を行う予定である。
- (7) 大野晋・大久保正 編集校訂『本居宣長全集 一七』(一九八七 筑摩書房)。
- (8) 小稿では、宛名や前文、頭語や結語等に関しても調査対象に含めたため、拙稿(二〇〇八)で提示した文字数と若干異なるところがある。
- (9) 彦坂(一九八七)では、庶民を読者層にもつ洒落本の漢字使用率を計測し、総文字数七三、二二三字中、漢字の延べ文字数が一三、五五二字であり、使用率が一八・五%にとどまることを明らかにしている。調査対象は『日本古典文学大系 五九 黄表紙・洒落本集』(一九五八、岩波書店)所収の六作品(『遊子方言』『辰巳之園』『道中粹語 録』『卯地臭意』『総籬』『傾城買二筋道』)である。
- (10) 江戸時代の代表的な往来物作者居初津奈が編んだ『女文章鑑』(貞享五)

一六八八年)の巻尾に付された女性消息文心得集には、「一 女文章はめづらしき字をかくべからず 仮名文字にてかく最やさしき也」という一項がある。この津奈の作である往来物『女書翰初学抄』の漢字使用率は三五・一%である。

- (11) 前掲注(9)と同様の調査による。
- (12) 稿末の「表4」「漢字使用率一覧」に収めたデータは、「使用率順位」「字種」「頻度」「延べ累積使用率」「異なり累積使用率」「女子用往来物における共出現数」「女子用往来物基本漢字順位」の七項目である。このうちの「女子用往来物における共出現数」は、拙稿(二〇〇三a)(二〇〇三b)(二〇〇七)等で調査対象とした一五本の往来物のうち何本に出現したか(一〜一五本)を示したものである。
- (13) 拙稿(二〇〇三a)(二〇〇三b)(二〇〇七)。
- (14) 石川謙・石川松太郎編(一九七三)「解説」による。
- (15) 天野(一九九八)四四頁。
- (16) 中根(二〇〇二)では、宣長の『経書』に「女誠」「女孝経」「女論語」「内訓」など女訓書の書名が記されているのは、村田家の影響ではないかと指摘する(二三頁、五〇〜五一頁)。こうしたものをお勝など村田家に育った女性が使用していた可能性も考えられる。
- (17) 苗村丈伯『女重宝記』(元禄五/一六九二年)にも「男の詞づかひを女のいひたるは、耳に当りて聞にくきものなり。女の詞は片言まじりに柔らかなるこそよけれ。文字にあたり、こぼしなどしていふ事、返す(返す)悪しき事なり。」とあり、女性のことば使いのありようを説いている。(上記引用は、長友千代治校注『女重宝記・男重宝記―元禄若者心得集―』現代教養文庫一五〇七一九九三年(社会思想社)による。)

参考文献

- 天野 晴子(一九九八)『女子消息型往来に関する研究―江戸時代における女子教育史の一環として―』風間書房
- 石川謙・石川松太郎編(一九七三)『日本教科書大系 往来編 第十五巻 女子用』講談社
- 梅村 佳代(二〇一三)「近世後期、子どもの読み書き稽古と往来物」『書物・出版と社会変容』一五「書物・出版と社会変容」研究会
- 江守 一郎(一九九〇)『勉強時代の幕開け―子どもと教師の世界史―』平凡社
- 中根 道幸(二〇〇二)『宣長さん 伊勢人の仕事』和泉書院
- 彦坂 佳宣(一九八七)『洒落本の漢字』『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院
- 本居宣長記念館(二〇〇二)『本居宣長事典』東京堂出版
- 前田 映子(一九九五)『近世 女人の書』淡交社

- 三好 信浩（一九八七）『商売往来の世界 日本型「商人」の原像をさぐる』NH
Kブックス537 日本放送出版協会
- 永井 悦子（二〇〇三a）「近世における女性の漢字使用をめぐる一考察」『早稲
田大学教育学研究科紀要別冊』一〇巻―二 早稲田大学大学院教育学研究科
- 永井 悦子（二〇〇三b）「女子用消息型往来における基本漢字抽出の試み」『計
量国語学』二四巻―二号 計量国語学会
- 永井 悦子（二〇〇七）「女子用往来物における漢字使用の実態と傾向」『早稲田
日本語研究』一六号 早稲田大学日本語学会
- 永井 悦子（二〇〇八）「江戸時代女性の言語生活に関する一考察―本居宣長母お
勝書簡における仮名字体―」『十文字国文』一四号 十文字女子大学国語国文学
会

（ながい えつこ）

【表4】お勝書簡使用漢字一覧（頻度順100位まで）

順位	字種	頻度	延べ累積使用率	異なり累積使用率	往来物基本漢字順位	往来物共出現数
1	候	2835	16.58	0.22	2	15
2	申	1336	24.39	0.44	3	15
3	御	942	29.89	0.66	1	15
4	事	406	32.27	0.88	4	15
5	被	385	34.52	1.10	13	11
6	一	382	36.75	1.32	11	15
7	入	322	38.63	1.54	9	15
8	心	267	40.20	1.75	16	15
9	々	234	41.56	1.97	22	13
10	下	233	42.93	2.19	7	15
11	成	224	44.24	2.41	17	14
12	日	207	45.45	2.63	15	15
13	致	197	46.60	2.85	51	10
14	度	184	47.67	3.07	20	12
15	悦	172	48.68	3.29	52	12
16	参	161	49.62	3.51	25	12
17	進	159	50.55	3.73	46	12
18	此	157	51.47	3.95	10	15
19	殿	152	52.36	4.17	379	4
20	分	143	53.19	4.39	149	11
21	可	138	54.00	4.61	105	7
22	存	135	54.79	4.82	8	12
23	兵	131	55.55	5.04	-	-
24	様	125	56.29	5.26	6	13
25	越	116	56.96	5.48	128	10
26	月	113	57.62	5.70	92	13
27	三	110	58.27	5.92	156	13
27	十	110	58.91	6.14	204	9
29	間	109	59.55	6.36	118	12
30	不	104	60.16	6.58	172	9
31	用	97	60.72	6.80	105	12
32	母	95	61.28	7.02	197	9
33	人	93	61.82	7.24	32	15
33	方	93	62.37	7.46	24	14
35	子	92	62.90	7.68	31	15
35	内	92	63.44	7.89	61	14
37	両	86	63.94	8.11	182	9
38	無	85	64.44	8.33	141	11
39	文	84	64.93	8.55	28	14
39	出	84	65.42	8.77	14	15
39	取	84	65.91	8.99	40	11
42	爰	83	66.40	9.21	271	8
42	何	83	66.88	9.43	23	15
44	届	81	67.36	9.65	609	6
45	物	80	67.83	9.87	38	15
46	随	79	68.29	10.09	469	6
47	尚	77	68.74	10.31	216	5
48	安	75	69.18	10.53	132	10
49	其	73	69.60	10.75	36	13
50	中	72	70.02	10.96	41	15
51	弥	71	70.44	11.18	244	8
51	召	71	70.85	11.40	57	12

順位	字種	頻度	延べ累積使用率	異なり累積使用率	往来物基本漢字順位	往来物共出現数
53	状	69	71.26	11.62	-	-
54	跡	68	71.66	11.84	501	4
55	敷	67	72.05	12.06	42	10
56	外	66	72.43	12.28	82	13
56	書	66	72.82	12.50	230	11
58	與	64	73.19	12.72	-	-
58	便	64	73.57	12.94	414	8
58	遣	64	73.94	13.16	118	8
61	義	58	74.28	13.38	72	13
61	春	58	74.62	13.60	42	14
61	頼	58	74.96	13.82	95	9
61	所	58	75.30	14.04	46	14
65	老	57	75.63	14.25	356	7
66	庵	56	75.96	14.47	-	-
67	息	55	76.28	14.69	197	8
68	上	53	76.59	14.91	5	15
69	返	52	76.89	15.13	34	13
70	五	51	77.19	15.35	113	14
70	気	51	77.49	15.57	64	13
70	相	51	77.79	15.79	50	14
73	先	50	78.08	16.01	76	11
74	又	49	78.37	16.23	124	12
74	見	49	78.65	16.45	18	15
76	前	48	78.93	16.67	151	11
77	皆	46	79.20	16.89	151	8
77	八	46	79.47	17.11	253	10
77	二	46	79.74	17.32	77	15
77	廿	46	80.01	17.54	715	4
77	合	46	80.28	17.76	128	12
82	替	45	80.54	17.98	182	8
82	通	45	80.81	18.20	55	12
82	年	45	81.07	18.42	35	14
85	節	43	81.32	18.64	92	14
86	金	42	81.57	18.86	414	6
86	町	42	81.81	19.08	532	4
88	大	40	82.05	19.30	116	11
88	共	40	82.28	19.52	77	11
90	半	37	82.50	19.74	54	9
90	調	37	82.71	19.96	302	7
90	少	37	82.93	20.18	197	9
90	帷	37	83.14	20.39	661	3
94	門	36	83.35	20.61	356	7
94	當	36	83.57	20.83	-	-
94	故	36	83.78	21.05	315	6
94	承	36	83.99	21.27	86	9
98	本	35	84.19	21.49	172	10
99	災	34	84.39	21.71	791	2
100	給	32	84.58	21.93	66	14
100	而	32	84.76	22.15	532	5
100	今	32	84.95	22.37	37	13
100	四	32	85.14	22.59	234	11
100	著	32	85.33	22.81	-	-